

福島第一原子力発電所視察

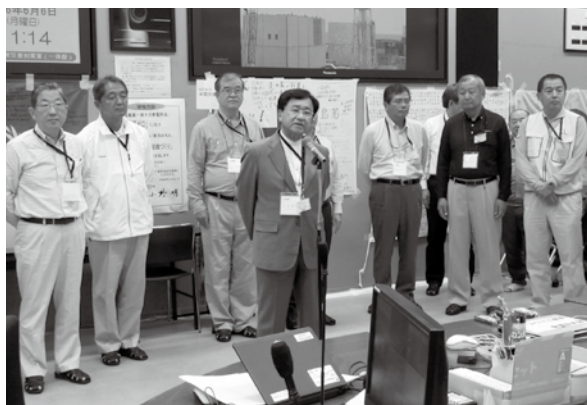
【6月6日】

小林喜光代表幹事ほか18人は、福島第一原子力発電所を訪問し、免震重要棟や汚染水対策の「凍土遮水壁」などを視察した。同原発の視察は今回で3回目となる。



世界に貢献できる 廃炉技術の発展に期待

東日本大震災後、経済同友会では「縮・原発」を打ち出した。中長期的に原発依存度を一定水準まで低減させ、再生可能エネルギーや省エネルギーを推進している。しかし、地球温暖化問題、国民生活や経済活動に不可欠なエネルギーの安定供給を考えると、不断の安全性向上を図り、国民の信頼醸成を図った上で、2030年の時点でも一定程度（下限20%）の原



職員を激励する小林喜光代表幹事



凍土遮水壁の説明を受ける

発依存が現実的だと提言している。

“福島の復興なくして、東日本大震災の復興は終わらない”という観点から、経済同友会では定期的に福島県を訪問している。特に、福島第一原子力発電所の事故原因究明と廃炉への道筋をしっかりと見届け、必要な意見発信を行っていきたいと考え、今回で3回目の視察となった。

また、廃炉を成功に導くには現場の力が重要であるが、実際に廃炉作業に従事している方々は、過酷な状況の中でさまざまな困難に直面しながらも、黙々と作業を遂行し、課題解決に当たられている。こうした方々の尽力に敬意を表し、直接現場で感謝と激励の言葉を伝え、少しでも士気向上につながればという思いも視察の背景にはある。

視察には、廣瀬直己東京電力ホールディングス代表執行役社長も同行した。一行は防護服を着用し、建屋周辺ではバスを降りて視察した。その後、使用済み核燃料を取り出した4号機の近くで、汚染水対策で重要な役割を果たすことが期待されている「凍土遮水壁」の説明を受けた。また、小林代表幹事は、免震重要棟で約100人の職員を激励した。

視察を終えた後、小林代表幹事は、「廃炉には、ロボティクスを含めた高度な科学技術が必要だ。前向きにとらえれば、日本の科学技術の粋を結集して行う意義は大きい。途上国では原発が増えている現状を考えると、ここで蓄積された廃炉技術は、必ず世界の貢献へとつながる。原発の再稼働も含め、原発問題は50年、100年の超長期的視点が必要だ。今後も、進捗状況の確認や現場の皆さんの激励のため、定期的に視察に訪れたい」と廃炉技術への期待を語った。